

「デジタル時代の歯科技工士写真術」

関根明

リバーサルフィルム時代が終焉を迎えて久しく、もはや多くの臨床家の間ではデジタル写真がスタンダードになった現代、デジタルの可能性は大きく広がった。

まず写真の確認が即座に行えることは一番の優位点だと思う。その他、写真の整理・写真の加工・プレゼンソフトへの汎用性がある。初期の頃はリバーサルフィルムと比較して再現性にやや劣るところもあったが画素数の大幅な拡大やライティングストロボの進化で今やアナログ写真を凌ぐものとなっている。

今回は補綴物撮影ではあえてストロボを使用しない何個かのライトや背景をアレンジして最適な光の角度を調整しつつ撮影する方法を紹介する。

撮影の後にはRAW現像ソフトやフォトショップ等で写真の加工や調整を行う。学術用写真では偽造にならないような加工をしなければならないことは倫理上当然であるが補綴物以外の背景等は補綴物を見やすくするうえで必要な技術と考える。

その他、プレゼンソフトの対応等を紹介したいと思う。

「効率の良い総義歯排列方法」

関根明

総義歯の排列方法には、代表格として教科書における上顎法と下顎法が挙げられる。その他、多くの先人やメーカー等からも提示されている。それぞれ優れた方法であり、利点を備えていると思う。

なかでも、教科書における下顎法は初心者でも理解しやすく排列トレーニングとしても行いやすい方法として優れた方法と考える。よって、臨床家の間では一番行われている方法である。

しかし、問題もある。例えば、最後に並べる上顎4番の時である。4番のスペースがない、3番との間に隙(テンチの間隙)ができてしまう、上顎歯列弓が前歯と調和しない等が起こりうる。そのような時には排列のやり直しや人工歯のサイズの取り換え等、無駄な時間ロスを伴うことが起こりうる。

そこで本講演では下顎法をアレンジした排列方法と、問題が起こりやすい2級や3級の対処方法等を理論的に解説したいと思う。